

2013 年度春季「賛助会員の会」開催報告

賛助会員の会 運営委員会 委員
住友電工ハードメタル株式会社 沖田 淳也

概要：春季大会会期中（於：東京工業大学）の3月14日、「賛助会員の会」第6回総会、第5回ニューテクノフォーラム（NTF）等の各種行事が開催された。総会、NTFに続き昼食懇談会、および2013年度第6回運営委員会を開催し今後の更なる活動の活発化に向けて議事が進められた。以下、概略を報告する。

1. 第6回「賛助会員の会」総会

最初に今回で1年の任期を満了される渋川会長より挨拶があり、これまでの活動に対する会員各位への謝意と、引き続き本会及び学会活動を通して震災後の経済、産業の活発化に貢献していくべき、との考えが示された。続いて北嶋運営委員長より、議案として新会長に住友電気工業常任顧問の倉阪氏を推薦する旨提案があり、信任された。その後、当日のスケジュール確認、次回以降のニューテクノフォーラムに関するテーマ募集等を行った。最後に倉阪新会長より、日本企業は生き残りをかけ国内をベースとしながら世界で戦う必要があり、そのためにも本会の活動を通じて産学協同をより強固にしていきたい、との就任挨拶があった。

2. 第5回ニューテクノフォーラム

テーマ：「生き残りを賭けた日本の製造業の技術・技能伝承の今後と海外展開」

名古屋工業大学藤本名誉教授より「日本伝統の技の伝承と基盤技術の育成」とのテーマで基調講演を頂いた。日本では従来は丁稚奉公など“見て技を盗む”という形で技術の伝承がなされてきたが、競争が激化する中より効果的、効率的な伝承が必要となっている。これを背景に、軍手をつけてミクロン台の凹凸を見つける熟練技能を基にした製品の開発や、視覚だけでなく触覚も含めて熟練技能を体験できる技術伝承のシステム化など、取り組まれている技術開発について紹介があった。

その後パネルディスカッションに移り、3件の話題提供があった。まずシチズン時計取締役の海野氏より国内マザー工場での生産設備のマイクロ化や、社内資格制度、“時計学校”といった人材育成制度について紹介があった。続いてアイシンAW生技副本部長の大林氏より、高度なSQC手法の活用やデザインレビュー、改善意欲を高める“大自慢大会”を活用して生産準備活動の高度化を図った“勤勉サイクル”について紹介があった。さらに東芝機械技術顧問の田中氏より、超精密加工機の基盤技術と“きさげ”等それらを支える技能、および一部熟練作業の自動化などについて紹介された。

会場を交えた議論では、安易に海外に出ていくのではなくあくまで国内をベースとした開発、生産技術の強化が必要との前提のもと、一方で例えばイタリアの洗練されたデザインを真似することはできないので、日本的な感覚、強みを生かすことが必要との意見が出された。また品質についても、計測された数値ではなくユーザが感じる品質こそが重要であり、そのような品質を高める方法論も重要との意見もあった。そのほか技術者の想像力を高める手法など、予定時間を超過する活発な議論が展開された。

3. 昼食懇談会

その後会場を移して昼食懇親会を実施し、現および新会長の挨拶、先ほどのニューテクノフォーラムについての議論などが活発に行われ、フランクな雰囲気の中で会員間の親睦をより深めることができた。

4. 運営委員会

運営委員会では、次期秋季大会でのニューテクノフォーラム等の内容について議論された。まず学会本部のワーキンググループでの企業の学会参加活性化に向けた討議内容が報告され、中小企業と大学／大企業とのマッチングを促進する取り組みを進めるとの方針が示された。その上で次回の「賛助会員の会」では、①大会初日の午前中に中小企業と大学のマッチング行事、②午後にニューテクノフォーラム（中小企業からの参加者にも興味をもってもらえる内容）を15時頃まで、③その後中小企業のシーズ技術講演、パネル展示、④夕刻に懇親会、との案が提案された。

各運営委員からは、中小企業からの参加者がメリットを感じられる内容とすべき、中小企業と大企業のマッチングは中々難しく、単なる技術紹介ではそれだけで終わってしまいかねない、経産省や公的機関からの方針説明、マッチングの成功事例や大学発ベンチャービジネスの紹介などといった提案がなされ、今後更に検討することとした。



「賛助会員の会」総会の様子



渋川会長の挨拶



倉阪新会長の挨拶



藤本英雄 講師（基調講演）



海野幹夫 講師



大林巧治 講師



田中克敏 講師



パネルディスカッションの様子